

書評

中嶋英介著

『近世武士道論』

——山鹿素行と大道寺友山の「武士」の育成——

（東北大学出版会・二〇一九年）

井上 泰至

「武士道」研究の困難さは、その内実の多様さにある。そもそも儒仏のように、確固とした体系もなく、核となるテキストもない。数多あるテキスト群の摘読に終われば、百人百通りの「武士道」がありました、という笑い話に終わりがねない。「武士道」研究の場合、まず何よりも研究対象のサンプリングが、その正否を決める。

さらに、研究対象を慎重に絞る過程でも、もう一つの困難が待ち構えている。「武士道」の多様さは、それを語る者たちの、「カオス」によるだけではない。「武士道」自体に、論点が多すぎるのである。治世論・用兵論・修養論、さらには殉死の禁止や敵討ちに象徴される「奉公」の法制史とも言うべき分野等々、これまでも武士道論は、その個別の報告か、個別の事例を無理に全体に及ぼして、キャッチ・フレーズを作ることに終始して

きた面が否めない。

さて、本書では、山鹿素行とその流れにある大道寺友山を選んでいいる。素行が当時の武士道論全てを蔽い尽くした存在だとは言いがたいが、明暦から寛文という本格的な平和が到来しつつあった時代に、武士の在り方を問うた特筆すべき例だと言うなら、この選択は正しい。また、その流れにある大道寺友山は、武士の官僚化が完成した享保期の典型例であることに疑いはなく、幕末までその影響が確認できる意味でも、サンプルとするに相応しい。三百頁に満たないボリュームで、「近世武士道論」を謳う本書の焦点が、この二人に絞られているのは、誠に筋の通った話である。

また、本書が副題に「武士」の育成」を掲げたのも頷けるところだ。ミリタリーにとつて、戦時に焦点となるのは、戦略・戦術の用兵、および兵站を確立する意味での治世である。しかし、平時にミリタリーが政治を行うとなれば、論点は「教育」にシフトしていく。素行は大物なので、彼には様々な顔があるが、教育者の側面に焦点を当てたのは的を射ている。兵学者の多くは、寛文期以降、戦略・戦術家から教育者に転身したと言つてよいし、素行にもその色は濃い。また確かに、友山は教育の面で最も寄与した人物に相違ない。

筆者はおそらく試行錯誤の中から、その選択をしていったのだろうが、そこにたどり着いた要因は、「武士」という言葉の容易ならざる複雑さに、気づいたことに求められよう。序では、

一口に武士といっても、どの階層を対象としているのか、という問いを披露しているが、この視点を獲得した時、数多ある「武士道」論の中から、「教育」に光を当てる有効性に気づいたのだと思われる。

もうひとつ本書の方法の上で指摘しておかなければならないのは、国文学研究資料館に委託された「山鹿文庫」を基盤にした依拠テキストの慎重な検討を経ている点にある。これは友山の『武道初心集』についても同様で、写本・刊本に渡る諸本の検討を踏まえている。これによって、これまで特に倫理学の側では、ややもすれば活字本で済ませてきた結果生じていた大きな欠落が浮かびあがり、この二人の兵学者の研究が新段階に至ったことを明確に示している。何も兵学に限ったことではないが、思想史研究もこうしたテキストへの目配り抜きに、今後の研究はありえないことを示しているのだ。

以下、そうした興味から、本書の成果について確認しておく。第一部は素行を対象としている。冒頭の「第一章 武教への道——山鹿素行の修養論」は、主著『山鹿語類』について、これまで等閑視されてきた「士談」編に注目、軍記の再解釈やリライトの中から、心身の錬成を意味する「ねり」「つとめ」の鍵語を浮かび上がらせ、それが延いては素行の修養論全体の核となっていたことを明らかにしたものである。軍記を『武家事紀』のような史書編纂の興味からだけでなく、教訓として使う点に注目したことは、このジャンルが明治に至るまで、ミリ

タリーの修身の教材でもあったのだから、当然と言えるが、こゝは倫理学の方では取り落とされてきた領域なのである。結果、重要な結論として「ねり」「つとめ」は外的な修養を指すことが浮かびあがってきた。これは儒学でいう「礼」の問題につながるところで、その辺りの関係が整理された時、従来の素行学の儒学との親和の議論に、新しい地平が生まれるはずだが、その入口で止まってしまっているのは、大変残念だ。

つづく、「第二章 山鹿素行の職分論再考」は、従来四民を道徳的にも統率する「士道」論と愚民観からのみ論じられてきたきらいがあることから語り出し、素行の教化の視線は、上中級武士と下級のそれとは使い分けをしていた点を明らかにした。史学では磯田道史らの武家階層論の成果が出ているにもかかわらず、倫理学あたりでは、まだ「武士」をひとくくりにして論じる乱暴な議論に終始していたが、素行の語る武士のあるべき道は、治国の武士道と、心身を鍛錬し「勇」を磨く武士道とで、それを説く対象となる階層に違いがあったことを明らかにしたことが、何よりも本論の功績である。軍記・軍書の世界で言えば、『太平記評判理尽鈔』には「仁」と「智」の「武道」が、『甲陽軍鑑』には「勇」の「武道」「武士道」が説かれることと、見事に対応していたわけで、素行もこうした位相と照応できる存在なのであった。

「第三章 山鹿素行の旧臣観」は、その素行の「使い分け」そのものを正面に見据える。焦点化するのには、「旧臣」への素行

の、意外に高い評価である。従来素行の武士道論では、「義」の紐帯ばかりが目される傾向にあった。それは中世的な個人的情誼を核とする主君との結びつきと区別する意味で重要ではあったが、素行は一方で武士団の核として、代々の主君との情誼を結んできた旧臣をむしろ評価する点で、二枚腰であったことを明らかにしている。素行が活躍し出す寛文期には、浪人の登用を積極的に主張する兵学者もいた。しかし、素行はそうではない。武士の過度な官僚化よりも、「兵民」へ評価を積極的にに行い、「武」に重心をおいた「国」を構想していたのである。本書の分析には、このような当代の兵学間の比較という視点がないことは残念だが、今後の研究に俟つべきであろう。

「第四章 山鹿素行の教化論——『武教小学』『山鹿語類』の差異を中心に」は、本書の中心となる論考である。仕える側の教訓を説いた『武教小学』と、後に同じ言い回しを使いながら君主層の教訓へとパラフレーズしていった『山鹿語類』との詳細な比較は、テキストの調査を踏まえた立論で手堅い。ここで焦点が当たってくるのが、武士の「礼」の中で重要な位置を占める「威儀」である。寡黙と礼儀を説く前者に対し、後者では国家安寧の基礎として、主君の振る舞いとそこからくる内面の鍛錬とが説かれていた。寛文期は、藩主の存在が象徴的になつてくるという時代的特徴も踏まえて論じられており。朱子学離れとのみ従来把握されていた素行の教化の懐の深さを明らかにした点で、本書の白眉と言つてよいだろう。

「第五章 山鹿素行の「民兵」育成論——「農」から「士」へ」は、第二部との結節点でもある。素行の学校論は、半農半武の層にも照準が当てられていたことを指摘し、この点は素行の主張する「武国」論ともつながる、という。素行の郷学の構想は、既成の寺社で、「文」のみならず、流鏑馬・競馬といった調練のカリキュラムを組み込んで教えるべき、というものであった。江戸の寺社の現実から見れば机上の空論にも見える「教化」制度論であるが、その辺の素行の具体的な見通しについては、本書で触れられていない。ただし、提出された問題は重要で、素行がそのような「皆兵」の思想とも言うべきものを持つていたとすれば、それは近代につながる一つの文化的資源となつたのではないか、という問題が生じる。ここに、素行字を受け継ぎつつ、幕末まで読まれるに至つた大道寺友山が存在が浮かび上がってくるのである。

もうひとつ、この論にあえてないものねだりをするなら、素行の「武国」概念とその教化は、神道を核とした「中朝」の概念と当然リンクしてこよう。この点をどう説明するのか、本書にその解答はない。さらに言えば、近代の素行の全集類には、素行の天皇批判が削除されており、筆者もそこに気づいてはいないようだが、この素行の歴史認識と、「神国」と「武国」を合致させる素行の日本観とはどのような関係にあるのか、これが整理された上で、論述がなされるべきであろう。

もちろん、そのためには、『武家事紀』のような史書におけ

る史観の検討、という大仕事が待っている。特に素行は「武朝」という用語を用いていた。同時期の林家や前期水戸学もにらみながら、一種の『太平記』史観（後醍醐の失政による「皇朝」の没落）との関連についての検討が、今後の必須の課題であることを指摘しておきたい。

第二部冒頭は、「第一章 大道寺友山『武道初心集』考」である。本書は、松代藩内で天保五年に刊行されたものが流布本であるためおおむねテキストもこれに依拠し、わずかにその原本とされる写本が二種報告されてきたのみであった。しかし、本論は、十九点の全国に散らばる写本と、二点の異本を悉皆調査したことで、『武道初心集』が流布本以前にも、またそれ以後も各地で書写され読まれていた実態を明らかにした労作である。当然これを踏まえた、諸本の内容の検討に入るステップを、著者も踏んでいる。その時、原本として焦点化され、古川哲史によって紹介された高田法古膳写本の位置づけが、中心課題となるのは当然の成り行きだろう。「第二章 高田法古膳写本『武道初心集』再考」がこれに当たる。それによれば、これまで流布本（松代版）の原本と位置付けられてきた高田法古膳写本は、原本と言うにはあまりに松代版と差異があり過ぎる本文しか有せず、むしろこのテキストの諸本は大きく拔萃系と松代系に大別でき、後者に属する真田本B・C本の方が原本の可能性が高いことを明らかにした。

以上二章の着実な基礎的考察により、明らかになってくる

『武道初心集』の本来の姿とはどういうものなのか？ これに迫ったのが最終章である「第三章 大道寺友山の士道論」であった。それによれば、友山の武士道論は端的に言って、徳川の治世の完成期である享保期の環境を抜きに語れないものであった、という。まず、なによりも「武」を忘れ「武」の弛緩した武士一般への教訓、特に「初心の武士」への、武士たるものを持つべき緊張感や献身の心得を説くものであった。また、享保期は家康像の神君化が完成し、自身『落穂集』など家康説話の編集に携わった友山らしく、彼のいう武士道は、家康説話を使いながら、仮構された家康の「上意」を含む一般化されたそれでもあった。以上から、従来儒教的士道論でひとくりにされてきた素行と友山の立ち位置の違いや、それぞれの課題に沿った武士道の教化の有り様が明らかにされたのであった。

本書は、着実な文献調査と検討を通して、平時の武士道を説いたと概括されてきた素行と友山とを軸に、その時代相の要求に答えようとした彼らの試みの実態と、その位相を明らかにした点で、成果を挙げたことは疑いない。

ただし、本書の記述は、素行と友山の武士道論の概括的なこれまでの記述を問い直すことに腐心する余り、この二人の武士道論に論述が絞られてしまい、時代相への目配りが限定されてしまった憾みが残る。

評者の立場から、この点、最後の要望を書き付けておきたい。これは本書が近世武士道論の新たな出発点になることを確信し

た故のものであることも、あらかじめ断っておく。素行のイメージは、これまで確かに大名や上級武士相手の官僚化した平時の「武士道」というものだった。しかし、実際の素行は、半農半武の下士層にも、学校で武の錬成を行えという、評者の言葉で言い換えるなら、「軍国」を構想する人だったという本書の指摘こそ、非常に重要であると思う。

というのも、学派は違うが、熊沢蕃山も荻生徂徠も、ある意味同じことを言っていたからである。蕃山が岡山藩時代、藩校の先駆けである花島道場を作り活動の中心としたことはよく知られているが、さらに庶民教育の場を提案して、これが郷学「閑谷学校」につながるわけで、そこでの教育は、素行同様、軍記から抜き書きをした武家説話を使った、「武」の教育であったことは注目に値する。蕃山の妹婿淡庵の編になる『武将感状記』は、序文によれば、その郷学での教育を反映したと伝えており、本書は江戸から明治まで最も読まれた武家説話集だった。また、共に「皆兵」論者であった素行と蕃山は、敵が多く、流謫されたり、藩を退いたりしていることも興味深い。

後の世代の徂徠については、『政談』『鈴録』などで展開していた、武士帰農論や軍役重視論が思い合わされる。かつて日野龍夫が「『謀反人』 荻生徂徠」（『江戸人とユートピア』）で鮮やかに解き明かしたように、武臣が文官となっているため、本来の「武」が喪失しつつあるという危機感そのものは、本書の指摘を踏まえるならば、ほぼ同世代の友山と同じであったのでは

ないだろうか。もちろん素行学をパラフレーズしながら微温的に仮構された家康像の御威光によって、武士道論へと回収していく、通俗的な友山と、より制度論の本質に分け入って、武士の土着による「武」の再生をラジカルに構想した徂徠とは、立場が全く異なることになるのだが。

友山と徂徠という対極の兵学者は、幕末の緊張感のある時期に、それぞれその系譜を生んでいく。「志士」が登場すれば、素行や友山の「民兵」論は、書かれた当時の文脈を超えて注目されていき、近代に再解釈されて、武士道の「聖典」となっていく流れは容易に想像できる。近代の素行顕彰の主役は乃木希典と井上哲次郎なのである。

他方、徂徠兵学の制度論の流れは、林子平がまずそうであったように、兵制改革の系譜へとつながり、明治の西周に至りつくはずである。本書の篤実な試みは、上記のような構想を忘れず、本書で扱った対象の、共時的かつ通時的な位置づけを怠らなかつた時、真に「近世武士道論」の内実を備えるであろう。今後を期待するものである。

（防衛大学校教授）